第１回富山県子育て支援・少子化対県民会議議事概要

１　日　時　　平成２１年９月３日（木）10:00～11:30
２　場　所　　富山県民会館３０４号室
３　議　事
（１）組織事項
（２）子育て支援・少子化対策条例とその普及啓発について
（３）基本計画の策定について

４　委員発言要旨
・基本計画策定部会の設置について

Ａ委員
　事務局提案の委員は、各界各層の識者で構成されているが、子育て真っ最中の代表も必要ではないか。また、子育ての苦しみが前面に出ている、楽しさを伝えることが必要ではないか。
　→子育て中の委員としては、プリプリキッズ代表に入っていただいている。
　　条例制定時にも実施したが、「子育てミーティング」等を通して、基本計画の策定に向けて子育て真っ最中の皆さんの声を聞いていきたいと考えている。

・富山県の子育て支援・少子化対策の現状と課題について

Ｂ委員
　運動会などで弁当を作らず子どもを休ませる親。放課後児童クラブの世話人を、クソババァ呼ばわりする子どもを注意したら逆切れする親。このような信じられない親が増えている。
　また、最初の子どものときは問題なくても二人目のときに不妊になるケースがある。子どもを産んだが子育てに悩む人達がたくさんいる。「赤ちゃん教室」があるが、実施期間を限っているので中途半端のようだし、発達障害の子に対する先生たちの知識不足、等々。特別に何かをするのではなく、今ある施策で、心の部分を重視した安心できる環境づくり施策に期待したい。

Ｃ委員
　家庭教育力の低下に対し、ＰＴＡ連合会では教育委員会と協力し「親を学び伝えるプログラム」に取り組んできている。
　現在は、子どもを預かることが前面に出され、子どもを預かるから安心して仕事をしなさい、子どもを生みなさいといった方向にある。親の立場では良いが、子どもにとってはどうなのか。親と子が相対する時間が少ないというのはどうなのか。外注育児になっているのではないか。
　親世代の意識改革が必要だ。子育て＝我慢ではなく、母にしか味わえない大切な時間で

あるというポジティブな志向へもっていきたい。子は親の背中を見て育つというが、子が親世代になったら今の家庭の状況が反映されていくので、出産・育児は、楽しく、かけがえのない貴重な時間であることをもっと前面に出してアピールしてはどうか。

Ａ委員

子育ては苦しいものではない。子どもに関わるわずかな期間を大切にポジティブに捉えることが大切だ。子育て期が人生で一番楽しかったと思える社会をつくっていくことが大切である。

また、子どもの自然体験が少ないというが、心豊かな体験には、父母の関与が大切である。母親の就労支援が子どもの健全育成を妨げている面もあり、子どもを生み育てる親がじっくり子どもと関われる時間を作り出す支援が必要。また、親の意識改革の大切である。

Ｄ委員

企業の支援も大切である。今の経済状況では、男性だけでなく女性も働かないと暮らしていけない。核家族化が進み、子どもを預けて働かないといけない家庭にとって、企業の理解が大切である。大企業は子育て支援の整備が進んでいるが、会社をやめなければならない企業も依然たくさんある。育児休業制度を充実させていただきたい。

子どもを育てるのは大変な面もあるが、これを上回る喜びもある。育児等に困ったときに相談できるところがあればありがたい。

Ｅ委員

ガールスカウトの活動を通してみると、子は親のやっていることをよく見ていると感じる。活動を通して私が思うには、子どもと家庭は結びついており親子の関係は捨てたものではないと思う。

Ｆ委員

子育て支援の各種活動があるが、縦横の連携について力を入れていただきたい。

（質問）シニアサポーターの育成についてどう考えているのか？

→シニアサポーター事業は、１９年度から実施し、昨年度５５５名から今年度６１８名になった。サポーターには、毎年ステップアップ研修も受講してもらっており、今後も充実していきたい。

（質問）各種子育て支援団体の縦横のつながりの強化について

→県内には、現在約１８０の子育てサークルがあり、様々な子育て支援活動を実施している。県では、子育て支援ネットワーク会議を開催しており、今後とも連携を図ってまいりたい。

（質問）シニアサポーターの高岡市での状況はどうか？

→高岡市には現在９５名のサポーターがおられ、活動場所は保育所が最も多い。

Ｇ委員

中小企業が子育て支援に薄いということはない。中小企業ほど辞められたら困るので、例えば、育児で休む職員の分を残りの皆で支えるという具体例も見てきた。

また、子育ての基本は家庭だと思う。新入社員は、あいさつもできない。常日頃から親

が子に言い聞かせるという姿勢が大切だと思う。行政にあっては、金銭的な支援も結構だが、親が家庭でしっかり役割を果たせるように心の面での支援が大切である。例えば、シニア世代を中心に子育て家庭を支援するような取組みとかは重要だと思う。

また、「家庭の日」についてだが、「気づき」をつくる上で、短時間でいいから、子どもの教育について親子が語り合える仕掛けを入れてもらえないか。

Ｈ委員

発熱があったら、子どもが求めるのは親である。保育所では、３８度以上になると保護者に連絡している。多くは迎えにこられるが、職場によっては、上司の顔色を伺う所もある。すべての人が子育てを応援する社会をつくることが必要で、こうした場合は、企業にも理解してもらい、子育て時間の創出が必要である。

Ｉ委員

赤ちゃんを持つ家庭を訪問し、お母さんの声を聞いていると、サークルやファミサポ等で一時預かりしてもらうとき、子どもが泣くのを見ると、わが子を置いていくのには躊躇がある。預かる側も同じ思いのようだ。

（質問）母子保健の妊産婦検診受診に関して、未受診率はどれほどか。また、未受診により何らかの問題が生じているのか。

→　妊婦健診受診票の利用率については、平成 20 年度 88.9%（公費対象の 5 回平均）となっている。

未受診により生じる問題としては、死産、母体死亡、未熟児出生等の周産期リスクが極めて高くなるほか、分娩費用の未払いや育児放棄、虐待など、その後の育児に大きく影響を及ぼすことが指摘されている。県としては、市町村及び県産婦人科医会とともに受診票の利用促進に努めているところである。

Ｊ委員

子どもの会の組織率が低下している。リーダーのなり手が減っている。その主因は、モンスターペアレンツの存在とゲームの方が楽しいという子どもたちだ。

このような厳しい状況であるが、子どもの健全な育成のために会として頑張ってまいりたい。

Ｋ委員

母親クラブとしては、各団体と連携しながら子育て支援に取り組みたい。年２～３回開催するイベントでは、親子づれの参加も目立つ。

P4 児童クラブの指導者養成について記載されているが、児童クラブだけでなく他の団体でも幅広くやっていただけるとありがたい。

P7 子どもに対する人権侵害の未然防止等において、スクールソーシャルワーカーの配置状況について、なぜ１１か。

新規里親の開拓とあるが、里親制度を知らない人が多い。もっと PR が必要ではないか。

Ｌ委員

次の３点を今後の示唆としたい。

①地域の活動圏域をどう考えるか。

介護保険は地域包括支援センター、障害分野は市町村単位の協議会と、圏域が確立しているが子育て支援は明確なものがない。この辺の確立が必要である。

②市町村との連携。

県と市町村の役割分担をどうするか。今度の基本計画では盛り込む必要があると思う。

③人材育成

ソーシャルワーカーも話題となっているが、人材をいかに育成していくかは、今後の子育て支援の推進には大切な要素だと思う。

Ｍ委員

北陸三県のなかで富山県は子育て支援は頑張っていると思う。５１人以上の企業に平成23 年度から行動計画の策定を義務付けたことは大きな一歩だ。子どもが熱を出したら迎えに帰るのは当然という状況になって欲しい。

また、学生の就職支援について考えてもらいたい。生産人口の減少に伴いシニアの力を活かすのは大切なことだが、その一方で、１０年前の超氷河期の若者がフリーターやニートとして給与も低く結婚できない状況をつくりだした。今の経済状況で同じ轍を踏まないために、若者たちのおかれた状況についても（現状と課題にある）子育て支援・少子化対策の枠に入らないのかも知れないが、大切なことなので目を向けていただきたい。